

# 苦しみや悩みは消えない

語り手 中 富 フサエ

大和町四丁目

私は、一九〇七（明治四〇）年七月二十七日、長崎市で生まれました。その当時としては裕福な家庭で、私の一家をはじめ、叔父や叔母も生活を共にしていた大家族の中で育ちました。父と叔父は三菱造船所の工員をしていました。晴れ着を着て、当時はめつたに見ることのできなかった進水式に連れていってもらったことが思い出です。

母のご先祖は長崎奉行で、ひいおじいさんは、シーボルト、勝海舟と一緒に写真に写っているほど偉い方で、歴史上の人物だったと聞いています。当時の長崎、特に大浦の海岸辺りには、ポルトガル、オランダ、フランス、ロシア、中国などの外国からやって来た人が多く、鼻の高い男の人が「怖い」と子供心に思いました。

私が七歳のとき、父が現在ロープウェイのある山を買って切り開き、家を建てて、私達一家は引っ越しました。家は裕福でしたが、子供の頃から独立心が強く、衣食住を自分でしなくてはと思い、十七歳のときに一人で家を出て、父の知合いの田川

さんのお母さんと一緒に、中国の青島（チンタオ）に渡りました。そこで田川さんのやっていたレストランで二年ほど働きました。

その後長崎に帰って、十九歳のときに、勤めていた会社の社長さんと結婚し、娘が一人生まれましたが、いろいろな事情があり別れました。その後、娘を両親に預けて、一人で中国に働きに行きました。当時の中国は、日本よりも物が豊富でしたし、親切にしてくださいる人もいたので中国に行きました。

大連というところで働いているときに、二度目の結婚をしました。青島にいたときの知合いに、偶然にあったことが縁となって結婚しました。長崎に置いてきた娘も呼び寄せ、その後生まれた二男三女の七人家族になりました。

夫は英語が達者な人でしたので、税関の検査官をしていました。その当時、日本人は中国人をひどくいじめていたでしょう。夫は税関で働いていたとき、よく石をぶつけられたそうです。特務機関の補佐官の離れを借りて住んでいた時、長男は昔の冷

蔵庫に使う大きな氷を、中国人に階段の上から落され、コンクリートに頭をぶつけて怪我をしました。夫はびっくりして、その中国人を殴りました。だけど私には不思議と何もしないんです。

一九四四(昭和十九)年、中国から疎開し、長崎市稲佐町(爆心地から一・八キロメートル)に家を借りて住みました。夫はまだ中国に召集されていたので、私と前夫の娘、五人の子供と住んでいました。

一九四五(昭和二〇)年八月九日十一時二分。私は炊事場で昼食の準備をしていました。「ドロドローン、ピカッ」、目が眩むような光と衝撃を受けました。三女(当時一歳三か月)は座敷に寝かせていましたが、爆風で吹き飛ばされて、崩れた床下に逆立ちになっていました。引き上げると目のあたりから血が流れていました。次男(当時三歳)は、私の方へ「ウマウマ」と近づいてきていたのでお腹でかばいました。次女(当時七歳)は、裏の崖の上の畑で友達と遊んでいました。花を摘んで立ち上がった瞬間爆風で飛ばされ、十メートルほど下の溝に落ちて、「助けて、助けて」と叫んでいました。

長女(当時九歳)と長男(当時五歳)は、川で遊んでいました。被爆の瞬間、杉の木が倒れてくるのを見て、長女が「伏せろ」と叫んだので下敷にならずに助かりました。山の蔭になっていたので火傷ありませんでした。長男は、「黄色い粉を吸い

込んだ」と言っていました。

前夫の娘(当時十八歳)は、近所の奥さんと一緒に配給の素麵を取りに行っており、肩を抱き合って帰ってきました。全身火傷で、洋服も焼けてぶら下がり「黄、赤、白のペンキをかぶったような蠟人形が立っているみたいで、お化けのよう」でした。その姿を見て驚いて口も聞けませんでした。

私の顔には油が流れ、頭のとっぺんには血管が膨れ、ミミズのような傷ができていました。わずかですが、今でもその痕が残っています。

私の妹は、松山町(現在の平和公園のそば)に住んでいました。被爆の前日に、身重の体で子供を二人連れて、大八車にお茶箱に入れた着物などを乗せて、私の家までやってきました。

「姉さん、これは姉さんにもらったものばかりだけど、預かってください。私が死んだら姉さんにあげる。」と言いました。それが妹との最後の別れになってしまいました。妹は子供をおぶって昼食の準備をしているときに被爆し、立ったままの姿で、お腹の子供と共に黒こげになって亡くなったと、義理の弟に聞きました。妹の長男は庭で三輪車に乗ったまま黒こげになって亡くなっていたそうです。

翌日近所の人に誘われて、缶詰工場の焼け跡に行き、缶詰を十個ほど拾ってきました。その帰りに湊神社のそばを通ると、製材所にあった材木を井形に組んで火をつけ、その中に亡くな

った人をどんどん入れて焼いているところがみえました。人間がまるでおいもかなにか焼くように焼かれていて、とても悲惨でした。あんな事はもう二度と繰り返してはいけませんのです。

それから四〇日ほど防空豪で過ごしました。青白い顔をし、頭や服にはしらみがわきたいへんな思いでした。その後次女が下痢を起こし、被爆十日くらいうなされました。今でいう赤痢のような様子で、「ぼんぼんが痛い」とピンク色をしたどろどろの便をしました。「素麺をツルツルってたべたいなあ」というので、前夫の娘と長女に家を任せ、長男だけを連れて買い出しに行きました。三歳の次男が「言ったらしゃい、言ったらしゃい」と、泣きながら見送るので辛かったです。

中国で行方のわからなくなっていた夫は一九四九(昭和二四)年に引き上げ船に乗って帰ってきましたが、間もなく一人で東京に働きに出ました。

それからの生活がたいへんでした。男手がないので私の肩に一家の生活はかかっていました。買い出しに行き、おにぎりなどの食べ物を作っては、丸山町の方の闇市で売って生活していました。上野町でお菓子や文房具を売るお店を始めましたが、なれない商売なので借金もできました。私が病気になるなかつたので何とか子供達を育てることができたのです。

東京に出てきたのは一九五八(昭和三三)年の四月でした。事情があつて子供達や夫とは離ればなれで一人出てきました。

東京駅の八重洲口に布団を預け、職を捜しました。そうしたら、「錦」という天麩羅屋のご主人が長崎で丁稚をしていたということで話が合い、そこで働くことになりました。その店で二年近く働きましたが、一月に一回しか休みがなく、疲れが出て具合が悪くなったので辞めました。

そして中野新橋の鈴木千代さんの家に間借りをして、道玄町(現在の中野区本町四丁目辺り)の授産所で働きました。働いては具合が悪くなって倒れ、またよくなると働くという繰返しの生活が続きました。

被爆者手帳は一九六三(昭和三八)年に取りました。一九四五(昭和二〇)年に長崎で特別手帳はもらっていましたが、東京に出てきてからは忙しくしていたので取るのが遅くなりました。

体がきつくなり、東友会に「助けてください」と手紙で連絡をし、取ることをすすめられました。被爆当時は、髪の毛が抜けるくらいで、ひどい急性原爆症にはなりませんでしたが、やはり放射能の影響を受けていたのです。カルシウムが人より少なく、その当時は日本に一人しかいない病気で、一九七八(昭和五三)年には、手足の指が開かなくなり、中野共立病院に入院しました。骨粗鬆症だったので。手足の指がだんだん開かなくなり、ピリピリとなって痺れるようで、手足が縮こまり歩けなくなりました。翌年には白内障になり入院しました。健康

管理手当は循環機能障害でもらっています。

私や私の子供を含め、被爆者の苦しみや悩みは一生消えませんが、戦争のため、夫や子供と離れ離れとなり、たいへんな思いをして生きてきました。戦争がなかったら幸せに暮らしていたでしょう。今は子供と会えるようになり、親切な方達に囲まれて幸せに過ごしています。この上、世界の平和、被爆者援護法の実現が実行されたら最上の喜びと存じます。



## 聞き書きを終えて

七月二十六日、朝から強い日差しが照りつける日、中富さんを中野区役所の会議室にお招きして被爆者の体験談をお聞きしました。

中富さんは戦後、大変な苦勞をして、お子さんたちを育て生きてきました。お話を聞いていて、きつと私だったら耐えることができないだろう。こんな小さな身体のどこにそんな力があるのだろうか、そして今どうしてこんなに穏やかに生きておられるのか、と驚かされました。

自由の風が吹く大正時代、独立心、好奇心旺盛だった中富さんは、夢を抱いて中国に渡り、何不自由なく、裕福な生活を送っていました。戦争がもし起こらなければ、原爆が落とされなければ、いわれない苦勞をすることはなく、家族が揃って仲良く暮らしていたでしょう。戦争がいかに人間に不幸をもたらすのかを改めて思いました。

現在、被爆者の悲願である被爆者援護法案が国会で審議されていますが、亡くなられた方も、そして今まで苦勞を重ね、生きてこられた方も、救われるものが実現することを願います。

古賀 由香

聞き書きが終わり、時計を見た時、思わず「エッ」と言いそうになってしまいました。何故ならもうお話を聞いてから何時間もたっていたからです。てっきりまだ三〇分位しかたっていないと思ったからです。でも、お話を聞いて色々な面でも感動しました。最近戦争から五〇年という事で何かと戦争や原爆の事が話題になり、そのたびに聞き書きの時の気持ちと感動がよみがえってきます。世界中の人々に多くの聞いた話を聞かせてあげたいです。

中学生・男子

今回、このボランティアに参加させて頂いて、とても勉強になりました。思えば、先生の勧めと、来年の広島への修学旅行の事前勉強を兼ねての参加でしたが、僕の思う以上に、被爆者の方々の苦悩や苦勞を知りました。また、被爆者の方々は、悲しい思い出があるにもかかわらず、快くお話をしてくださいってうれしく思いました。そして、被爆者の方々が高齢化していく中、こういう機会にお話しをして頂けたのは、自分にとって貴重な体験だと思います。

中学生・男子